

保育所保育指針の改定から考える保育実習Ⅰ（施設） のあり方に関する考察

寺田 博行・大野 地平・海老江 康二・宮本 茂樹

本研究の目的は、新たに告示された保育所保育指針の検討をとおして、本学保育科の保育実習Ⅰ（施設）のあり方について考察することにある。考察にあたっては、はじめに新しい保育所保育指針の改定のポイントについて整理した。次に新しい保育所保育指針における「保育士」像を明らかにしつつ、必要とされる実習教育について検討した。最後に本学で考えられる保育実習Ⅰ（施設）での対応について検討した。

その結果、次のことが明らかとなった。①今まで社会福祉の一分野として考えていた保育というものに対し、社会福祉的視点を切り離し、「子ども」に限定した児童福祉でも社会的養護でもない「保育所保育」に関する専門職として保育士を位置づけたものであること。②保育科の施設実習委員会では、すでに保育実習Ⅰ（施設）を対人援助職としての基礎的実習として位置付けていることから、その視点を大切にしつつ、さらに指導内容を強化していく必要性があること。

キーワード：保育実習Ⅰ 保育者養成 保育所保育指針 児童福祉

はじめに

本研究の目的は、新たに告示された保育所保育指針の検討をとおして、本学の保育実習Ⅰ（施設）のあり方について考察することにある。

平成 29 年、新たな保育所保育指針が告示された。平成 30 年 2 月現在、保育所保育指針解説はまだ出版されていないものの、改定のポイント等については、社会保障審議会児童部会保育専門委員会の「保育所保育指針の改定に関する議論のとりまとめ」（平成 28 年 12 月）などをとおして、把握することができる。

保育所保育指針が改定された以上、保育実習Ⅰ（施設）においても、新たな保育所保育指針を踏まえつつ、実習指導を行うことが求められてくると思われる。このような問題意識から、本研究では、新たに告示された保育所保育指針の検討をとおして、本学の保育実習Ⅰ（施設）における指導のあり方について考察することにした。

実習指導のあり方については、これまで継続して検討を進めてきたので、その成果を踏まえるとともに、他の研究も視野におさめながら、考察を進めることにしたい。

考察にあたっては、まず、はじめに新しい保育所保育指針の概要について整理する。次に新しい保育所保育指針における「保育士」像を明らかにしつつ、必要とされる教育について検討する。最後に本学保育科で考えられる保育実習Ⅰ（施設）での対応について検討することにした。

なお、本稿においては平成 30 年度に施行される新しい

保育所保育指針を「新保育指針」、現行の平成 20 年度の保育所保育指針を「旧保育指針」と表記する。

1. 新保育指針の概要

平成 29 年 3 月 31 日、改正された保育所保育指針が告示され、平成 30 年 4 月 1 日から適用される。昭和 40（1965）年の制定以来第四次目の改正である。

前回平成 20（2008）年の改定以来、保育所保育指針は、それまでの「通知」という保育所保育のガイドライン的なものから、「告示」として法的規制力を持つようになっていく。

保育所保育指針の基本的な内容は、「保育所の保育」が「養護と教育を一体的に行うことをその特性とし、その内容」を示したものである（児童福祉施設の設備及び運営に関する最低基準第 35 条）。養護とは「生命の保持及び情緒の安定を図るために保育士等が行う援助や関わり」（保育所保育指針 1965 年よりそれぞれ用いられていた「情緒の安定」と「生命の保持」の用語を、保育所保育指針 1990 では一体化）であり、保育所保育の基礎的事項である。教育は、特に 3 歳以上児に関しては、幼稚園教育要領の五領域（当初は六領域）と合致させ、整合性を確保している。

平成 20 年に告示された保育所保育指針後、以下のような社会情勢の変化を踏まえ、改定について検討された。すなわち、「量」と「質」の両面から子どもの育ちと子育てを社会全体で支える「子ども・子育て支援新制度」の施行

(平成 27 年 4 月) されたこと。0～2 歳児を中心とした保育所利用児童数の増加していること。子育て世帯における子育ての負担や孤立感の高まり、児童虐待相談件数の増加等、である。

そのような背景のもと、社会保障審議会児童部会保育専門委員会において保育所保育指針の改定の方針性がとりまとめられた。その概要は、以下のとおりである(平成 28 年 12 月 21 日)。

○乳児・3 歳未満児保育の記載の充実

この時期の保育の重要性、0～2 歳児の利用率の上昇等を踏まえ、3 歳以上児とは別に項目を設けるなど記載内容を充実。(特に、0 歳児の保育については、乳児を主体に「身近な人と気持ちを通じ合う」「身近なものに関わり感性が育つ」「健やかに伸び伸びと育つ」という視点から整理・充実。)

○幼児教育の積極的な位置づけ

保育所保育も幼児教育の重要な一翼を担っていること等を踏まえ、卒園時までには育ってほしい姿を意識した保育内容や保育の計画・評価の在り方等について記載内容を充実。主体的な遊びを中心とした教育内容に関して、幼稚園、認定こども園との整合性を引き続き確保。

○健康及び安全の記載の見直し

子どもの育ちをめぐる環境の変化を踏まえ、食育の推進、安全な保育環境の確保等に関して、記載内容を見直し。

○「子育て支援」の章を新設

保護者と連携して「子どもの育ち」を支えるという視点を持って、子どもの育ちを保護者とともに喜び合うことを重視するとともに、保育所が行う地域における子育て支援の役割が重要になっていることから、「保護者に対する支援」の章を「子育て支援」に改め、記載内容を充実。

○職員の資質・専門性の向上

職員の資質・専門性の向上について、キャリアパスの明確化を見据えた研修機会の充実なども含め、記載内容を充実。

この方針性のもとで改定された保育所保育指針は、第 1 章～第 5 章で構成され、保育所における保育の内容及びこれに関連する運営に関する事項を定めるものとして、

第 1 章 総則 保育所保育が幼児教育の重要な一翼を担っていること等も踏まえ、「4. 幼児教育を行う施設として共有すべき事項」を定めるなど、保育所保育の基本となる考え方について記載。

第 2 章 保育の内容 乳児、3 歳未満児、3 歳以上児の保育について、それぞれ、ねらい及び内容を記載。特に、3 歳以上児の保育について、幼稚園、認定こども園との整

合性を確保。

第 3 章 健康及び安全 子どもの育ちをめぐる環境の変化を踏まえ、食育の推進、安全な保育環境の確保等について記載。

第 4 章 子育て支援 保護者と連携して「子どもの育ち」を支えることを基本として、保育所が行う子育て支援の役割等について記載。

第 5 章 職員の資質向上 職員の資質・専門性の向上について、キャリアパスを見据えた研修機会の充実なども含め記載。

という内容になっているⁱ。

2. 新保育指針における「保育士」像

今回改定されたものはあくまで「保育所保育指針」であり、ここに示されているものが保育士の担う役割の全てではないが、保育士の大半が保育所勤務であることを考えれば、新保育指針において、保育士として期待される役割について方向性が出されていると考えていいだろう。

前述した新保育指針の概要を考え、ここから考えられる「保育士像」とはどのようなものとなるか。まず、旧保育指針と比較して、新保育指針において重点化されたものを要約すると、①乳児や 1 歳以上 3 歳未満児の保育の狙いや内容についての記述の充実、②保育所を幼児教育施設の一つとして認めた点が挙げられる。

①については、現状の保育所が担っている側面について、より充実した保育が行えるように示したものである。例えば、新保育指針の第 2 章「保育の内容」において、乳児、1 歳以上 3 歳未満児の保育に関わるねらい及び内容について基本的事項が定められ、いわば到達目標に類するものが設定されたことがそれに当たる。これによって、保育所において乳児から 3 歳未満児までの利用児に対しても計画的な保育、養護が求められるということとなるのである。

②については、新保育指針第 1 章の総則に「幼児教育を行う施設として共有すべき事項」があげられている。これは、同時期に改訂された幼稚園教育要領との整合性もあり、内容としてはほぼ同一のものとなっている。しかし、本来が児童福祉法に基づいた児童福祉施設としての保育所であることを考えれば、この記載がなされたということは、保育士が担うべき役割として、より幼稚園教諭に近いものが求められるということとなる。上記以外の内容で考えれば、例えば新保育指針第 2 章では小学校との連携が明示されているし、さらには第 4 章「子育て支援」の項目においては、外国籍の子ども、家庭に対する配慮等、現状の保育所が抱えている問題も明記している。

保育士等キャリアアップ研修の分野及び内容

研修分野	ねらい	内容
①乳児保育 (主に0歳から3歳未満児向けの保育内容)	・乳児保育に関する理解を深め、適切な環境を構成し、個々の子どもの発達の状態に応じた保育を行う力を養い、他の保育士等に乳児保育に関する適切な助言及び指導ができるよう、実践的な能力を身に付ける。	・乳児保育の意義 ・乳児保育の環境 ・乳児への適切な関わり ・乳児の発達に応じた保育内容 ・乳児保育の指導計画、記録及び評価
②幼児教育 (主に3歳以上児向けの保育内容)	・幼児教育に関する理解を深め、適切な環境を構成し、個々の子どもの発達の状態に応じた幼児教育を行う力を養い、他の保育士等に幼児教育に関する適切な助言及び指導ができるよう、実践的な能力を身に付ける。	・幼児教育の意義 ・幼児教育の環境 ・幼児の発達に応じた保育内容 ・幼児教育の指導計画、記録及び評価 ・小学校との接続
③障害児保育	・障害児保育に関する理解を深め、適切な障害児保育を計画し、個々の子どもの発達の状態に応じた障害児保育を行う力を養い、他の保育士等に障害児保育に関する適切な助言及び指導ができるよう、実践的な能力を身に付ける。	・障害の理解 ・障害児保育の環境 ・障害児の発達の援助 ・家庭及び関係機関との連携 ・障害児保育の指導計画、記録及び評価
マネジメント	・主任保育士の下でミドルリーダーの役割を担う立場に求められる役割と知識を理解し、自園の円滑な運営と保育の質を高めるために必要なマネジメント・リーダーシップの能力を身に付ける。	・マネジメントの理解 ・リーダーシップ ・組織目標の設定 ・人材育成 ・働きやすい環境づくり

研修分野	ねらい	内容
④食育・アレルギー対応	・食育に関する理解を深め、適切に食育計画の作成と活用ができる力を養う。 ・アレルギー対応に関する理解を深め、適切にアレルギー対応を行うことができる力を養う。 ・他の保育士等に食育・アレルギー対応に関する適切な助言及び指導ができるよう、実践的な能力を身に付ける。	・栄養に関する基礎知識 ・食育計画の作成と活用 ・アレルギー疾患の理解 ・保育所における食事の提供ガイドライン ・保育所におけるアレルギー対応ガイドライン
⑤保健衛生・安全対策	・保健衛生に関する理解を深め、適切に保健計画の作成と活用ができる力を養う。 ・安全対策に関する理解を深め、適切な対策を講じることができる力を養う。 ・他の保育士等に保健衛生・安全対策に関する適切な助言及び指導ができるよう、実践的な能力を身に付ける。	・保健計画の作成と活用 ・事故防止及び健康安全管理 ・保育所における感染症対策ガイドライン ・保育の場において血液を介して感染する病気を防止するためのガイドライン ・教育・保育施設等における事故防止及び事故発生時の対応のためのガイドライン
⑥保護者支援・子育て支援	・保護者支援・子育て支援に関する理解を深め、適切な支援を行うことができる力を養い、他の保育士等に保護者支援・子育て支援に関する適切な助言及び指導ができるよう、実践的な能力を身に付ける。	・保護者支援・子育て支援の意義 ・保護者に対する相談援助 ・地域における子育て支援 ・虐待予防 ・関係機関との連携、地域資源の活用
保育実践	・子どもに対する理解を深め、保育者が主体的に様々な遊びと環境を通じた保育の展開を行うために必要な能力を身に付ける。	・保育における環境構成 ・子どもの関わり方 ・身体を使った遊び ・言葉・音楽を使った遊び ・物を使った遊び

表1 保育士等キャリアアップ研修の分野及び内容ⁱⁱⁱ

さらに、ポイントとして考えたいことは、キャリアパスに係る研修体制を保育所保育指針に明記したことである。新保育指針第5章において、「職員の資質向上」の項目にそれが記載されている。これについては、別途、保育士等キャリアアップ研修のガイドラインが作成され示されているⁱⁱ。

表1はそこで示された保育士等キャリアアップ研修の分野及び内容の一覧である。内容としては専門分野にあたる研修が①乳児保育、②幼児教育、③障害児保育、④食育・アレルギー対応、⑤保健衛生・安全対策、⑥保護者支援・子育て支援であり、それに加えてミドルリーダーと呼ばれる中堅職員にはマネジメント研修、保育士試験合格者等に見られる実習経験の少ないものには保育実践研修がなされる体制が求められている。換言すれば、この研修の内容こそが、新保育指針において期待される「保育士像」といってよいだろう。つまり、新保育指針で改定された内容を効果的に実践し、それを通じてキャリアパスの形成を図るとした時、その研修の内容が保育士に期待される役割であり、これからの保育士に必要な教育の方向性を示すものといえる。

では期待される役割とは何か。前述の内容を見れば、保

育士が、より「子ども」や「子育て支援」に傾注し、それを専らとする方向性がうかがえる。一見すると保育士の業務として齟齬なく、問題がないように考えられるが、これは「保育所における保育士」こそが「保育士」であることの証左となり得る。さらに言えば、今まで保育士という資格で担われてきた知的障害を中心とした障害者支援の分野は考慮されず、あくまで「保育所」を中心に考えたものである。これは、保育士の役割を子どもに限定し、さらには幅広い視野というより、子どもに関わる課題のうち、保育所内で起こり得るもの、対応に迫られるものに限られたものであると言えよう。つまり、今まで社会福祉の一分野として考えていた保育というものに対し、社会福祉的視点を切り離し、「子ども」に限定した児童福祉でも社会的養護でもない「保育所保育」に関する専門職として保育士を位置づけたものといえるだろう。

3. 必要とされる実習教育

新保育指針で保育所保育（第2節でも述べたがこの言葉が頻出している）を行う保育士は、子どもの発達（月齢、年齢）にあわせて保育することはもちろんであるが、さら

に在園時間等異なることも配慮し一律とならないような関わり方があるなどの記載がある。

また従来より、子どもは「3歳以上児」と「3歳未満児」、3歳未満児についてはさらに「1歳以上3歳未満児」「(1歳未満の)乳児保育」に細分化して記載されているが、新保育指針では、1歳未満児保育(乳児保育)の充実と3歳以上児は幼稚園教育要領と同様の内容とし、いわゆる5領域と呼ばれる、保育のねらい及び内容に関する「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の定義や内容も共通のものとなった。すなわち、単に発達にあった視点のみでなく、小学校入学以降を見据えた乳幼児期の発達の連続性をふまえた保育が求められている。これらのことから、2節で明らかになった「保育所保育」や「子ども」への支援を中心とした保育士像をもとにその養成することが求められる。

ではその養成に必要な教育はどのようなものとなるか。今回は実習に焦点を置き、考えていきたい。前述のように、保育所保育を中心とした保育士像がもととなるため、保育士に必要な保育実習について、保育実習Ⅰ(保育所)、保

育実習Ⅱ(保育所)の実習が養成になるということになる。

表1で示したキャリアアップ研修の分野および内容を見ると、保育所においての子どもに対する専門職として実践的な研修を実施する旨が記載されていることから、そのベースとなる教育の必要性が求められている。その教育のベースとなる保育所実習における養成の視点は表2、表3のようになる。

特に表3は保育実習Ⅱにおける実習の目標及び教授内容に関するものである。厚生労働省では保育士養成課程の見直しを行っており、平成31年からの実施を目標にその整備が進められている。したがって、ここに示される教授内容等が保育所保育指針の傾向を踏まえているといっているだろう。これを見ると、目標については、現在行われている養成と変更なく、また内容においても、一部用いられる言葉の修正のみとなっており、差異はほとんどない。つまり、保育実習Ⅱに代表される保育所での実習は現行と変化はないということもできる。

では施設における実習においてはどうかであろうか。それ

見直し後	現行
<p>【保育実習】</p> <p><科目名> 保育実習Ⅰ(実習・4単位:保育所実習2単位・施設実習2単位)</p> <p><目標></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 保育所、児童福祉施設等の役割や機能を具体的に理解する。 2. 観察や子どもとの関わりを通して子どもへの理解を深める。 3. 既習の教科目の内容を踏まえ、子どもの保育及び保護者への支援について総合的に理解する。 4. 保育の計画・観察・記録及び自己評価等について具体的に理解する。 5. 保育士の業務内容や職業倫理について具体的に理解する。 <p><保育所実習の内容></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 保育所の役割と機能 <ol style="list-style-type: none"> (1) 保育所における子どもの生活と保育士の援助や関わり (2) 保育所保育指針に基づく保育の展開 2. 子ども理解 <ol style="list-style-type: none"> (1) 子どもの観察とその記録による理解 (2) 子どもの発達過程の理解 (3) 子どもへの援助やかかわり 3. 保育内容・保育環境 <ol style="list-style-type: none"> (1) 保育の計画に基づく保育内容 (2) 子どもの発達過程に応じた保育内容 (3) 子どもの生活や遊びと保育環境 (4) 子どもの健康と安全 4. 保育の計画・観察・記録 <ol style="list-style-type: none"> (1) 全体的な計画と指導計画及び評価の理解 (2) 記録に基づく省察・自己評価 5. 専門職としての保育士の役割と職業倫理 <ol style="list-style-type: none"> (1) 保育士の業務内容 (2) 職員間の役割分担や連携・協働 (3) 保育士の役割と職業倫理 <p><児童福祉施設等(保育所以外)における実習の内容></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 施設の役割と機能 <ol style="list-style-type: none"> (1) 施設における子どもの生活と保育士の援助や関わり (2) 施設の役割と機能 2. 子ども理解 <ol style="list-style-type: none"> (1) 子どもの観察とその記録 (2) 個々の状態に応じた援助やかかわり 3. 施設における子どもの生活と環境 <ol style="list-style-type: none"> (1) 計画に基づく活動や援助 (2) 子どもの心身の状態に応じた生活と対応 (3) 子どもの活動と生活環境 (4) 健康管理、安全対策の理解 4. 計画と記録 <ol style="list-style-type: none"> (1) 支援計画の理解と活用 (2) 記録に基づく省察・自己評価 5. 専門職としての保育士の役割と倫理 <ol style="list-style-type: none"> (1) 保育士の業務内容 (2) 職員間の役割分担や連携 (3) 保育士の役割と職業倫理 	<p>【保育実習】</p> <p><科目名> 保育実習Ⅰ(実習・4単位:保育所実習2単位・施設実習2単位)</p> <p><目標></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 保育所、児童福祉施設等の役割や機能を具体的に理解する。 2. 観察や子どものかかわりを通して子どもへの理解を深める。 3. 既習の教科目の内容を踏まえ、子どもの保育及び保護者への支援について総合的に学ぶ。 4. 保育の計画、観察、記録及び自己評価等について具体的に理解する。 5. 保育士の業務内容や職業倫理について具体的に学ぶ。 <p><保育所実習の内容></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 保育所の役割と機能 <ol style="list-style-type: none"> (1) 保育所の生活と一日の流れ (2) 保育所保育指針の理解と保育の展開 2. 子ども理解 <ol style="list-style-type: none"> (1) 子どもの観察とその記録による理解 (2) 子どもの発達過程の理解 (3) 子どもへの援助やかかわり 3. 保育内容・保育環境 <ol style="list-style-type: none"> (1) 保育の計画に基づく保育内容 (2) 子どもの発達過程に応じた保育内容 (3) 子どもの生活や遊びと保育環境 (4) 子どもの健康と安全 4. 保育の計画、観察、記録 <ol style="list-style-type: none"> (1) 保育課程と指導計画の理解と活用 (2) 記録に基づく省察・自己評価 5. 専門職としての保育士の役割と職業倫理 <ol style="list-style-type: none"> (1) 保育士の業務内容 (2) 職員間の役割分担や連携 (3) 保育士の役割と職業倫理 <p><居住型児童福祉施設等及び障害児通所施設等における実習の内容></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 施設の役割と機能 <ol style="list-style-type: none"> (1) 施設の生活と一日の流れ (2) 施設の役割と機能 2. 子ども理解 <ol style="list-style-type: none"> (1) 子どもの観察とその記録 (2) 個々の状態に応じた援助やかかわり 3. 養護内容・生活環境 <ol style="list-style-type: none"> (1) 計画に基づく活動や援助 (2) 子どもの心身の状態に応じた対応 (3) 子どもの活動と生活環境 (4) 健康管理、安全対策の理解 4. 計画と記録 <ol style="list-style-type: none"> (1) 支援計画の理解と活用 (2) 記録に基づく省察・自己評価 5. 専門職としての保育士の役割と倫理 <ol style="list-style-type: none"> (1) 保育士の業務内容 (2) 職員間の役割分担や連携 (3) 保育士の役割と職業倫理

表2 保育士養成課程を構成する各教科目の目標及び教授内容について(保育実習Ⅰ)^{iv}

を示したものが前述の表2および表4である。表4は保育実習Ⅲ（施設）の教授内容に関するものだが、これを見ても、現在行われている実習との差異はそれほど見受けられない。あえて言えば「(利用者)」という表記が加わっただけである。つまり、施設における実習においても念頭にあるのは、子どもが必要とする社会的な養護であり、すなわち、障害、家庭に関する問題、保護者が抱える問題等であって、子ど

もの専門職として、その経験を「保育所」で活かすことを念頭に置いたものであると考えても差し支えないだろう。

ここで問題となるのは、施設実習において実習先の多くを占めている施設が「障害者支援施設」であるということである。これについては、次項で記載されるが、この点を踏まえて実習における教育を考える必要があるのではないだろうか。

見直し後	現行
【保育実習】 <科目名> 保育実習Ⅱ（実習・2単位：保育所実習） <目標> 1. 保育所の役割や機能について、具体的な実践を通して理解を深める。 2. 子どもの観察や関わりの視点を明確にすることを通して、保育の理解を深める。 3. 既習の教科や保育実習Ⅰの経験を踏まえ、子どもの保育及び子育て支援について総合的に理解する。 4. 保育の計画・実践・観察・記録及び自己評価等について、実際に取り組み、理解を深める。 5. 保育士の業務内容や職業倫理について、具体的な実践に結びつけて理解する。 6. 実習における自己の課題を明確化する。 <内容> 1. 保育所の役割や機能の具体的展開 (1) 養護と教育が一体となって行われる保育 (2) 保育所の社会的役割と責任 2. 観察に基づく保育の理解 (1) 子どもの心身の状態や活動の観察 (2) 保育士等の援助や関わり (3) 保育所の生活の流れや展開の把握 3. 子どもの保育及び保護者・家庭への支援と地域社会等との連携 (1) 環境を通して行う保育、生活や遊びを通して総合的に行う保育 (2) 入所している子どもの保護者に対する子育て支援及び地域の保護者等に対する子育て支援 (3) 関係機関や地域社会との連携・協働 4. 指導計画の作成・実践・観察・記録・評価 (1) 全体的な計画に基づく指導計画の作成・実践・省察・評価と保育の過程の理解 (2) 作成した指導計画に基づく保育の実践と評価 5. 保育士の業務と職業倫理 (1) 多様な保育の展開と保育士の業務 (2) 多様な保育の展開と保育士の職業倫理 6. 自己の課題の明確化	【保育実習】 <科目名> 保育実習Ⅱ（実習・2単位：保育所実習） <目標> 1. 保育所の役割や機能について具体的な実践を通して理解を深める。 2. 子どもの観察や関わりの視点を明確にすることを通して保育の理解を深める。 3. 既習の教科や保育実習Ⅰの経験を踏まえ、子どもの保育及び保護者支援について総合的に学ぶ。 4. 保育の計画、実践、観察、記録及び自己評価等について実際に取り組み、理解を深める。 5. 保育士の業務内容や職業倫理について具体的な実践に結びつけて理解する。 6. 保育士としての自己の課題を明確化する。 <内容> 1. 保育所の役割や機能の具体的展開 (1) 養護と教育が一体となって行われる保育 (2) 保育所の社会的役割と責任 2. 観察に基づく保育理解 (1) 子どもの心身の状態や活動の観察 (2) 保育士等の動きや実践の観察 (3) 保育所の生活の流れや展開の把握 3. 子どもの保育及び保護者・家庭への支援と地域社会等との連携 (1) 環境を通して行う保育、生活や遊びを通して総合的に行う保育の理解 (2) 入所している子どもの保護者支援及び地域の子育て家庭への支援 (3) 地域社会との連携 4. 指導計画の作成、実践、観察、記録、評価 (1) 保育課程に基づく指導計画の作成・実践・省察・評価と保育の過程の理解 (2) 作成した指導計画に基づく保育実践と評価 5. 保育士の業務と職業倫理 (1) 多様な保育の展開と保育士の業務 (2) 多様な保育の展開と保育士の職業倫理 6. 自己の課題の明確化

表3 保育士養成課程を構成する各教科目の目標及び教授内容について（保育実習Ⅱ）^v

見直し後	現行
【保育実習】 <科目名> 保育実習Ⅲ（実習・2単位：保育所以外の施設実習） <目標> 1. 既習の教科や保育実習の経験を踏まえ、児童福祉施設等（保育所以外）の役割や機能について実践を通して、理解する。 2. 家庭と地域の生活実態にふれて、子ども家庭福祉、社会的養護、障害児支援に対する理解をもとに、保護者支援、家庭支援のための知識、技術、判断力を習得する。 3. 保育士の業務内容や職業倫理について具体的な実践に結びつけて理解する。 4. 実習における自己の課題を理解する。 <内容> 1. 児童福祉施設等（保育所以外）の役割と機能 2. 施設における支援の実際 (1) 受容し、共感する態度 (2) 個人差や生活環境に伴う子ども（利用者）のニーズの把握と子ども理解 (3) 個別支援計画の作成と実践 (4) 子ども（利用者）の家族への支援と対応 (5) 各施設における多様な専門職との連携・協働 (6) 地域社会との連携・協働 3. 保育士の多様な業務と職業倫理 4. 保育士としての自己課題の明確化	【保育実習】 <科目名> 保育実習Ⅲ（実習・2単位：保育所以外の施設実習） <目標> 1. 児童福祉施設等（保育所以外）の役割や機能について実践を通して、理解を深める。 2. 家庭と地域の生活実態にふれて、児童家庭福祉及び社会的養護に対する理解をもとに、保護者支援、家庭支援のための知識、技術、判断力を養う。 3. 保育士の業務内容や職業倫理について具体的な実践に結びつけて理解する。 4. 保育士としての自己の課題を明確化する。 <内容> 1. 児童福祉施設等（保育所以外）の役割と機能 2. 施設における支援の実際 (1) 受容し、共感する態度 (2) 個人差や生活環境に伴う子どものニーズの把握と子ども理解 (3) 個別支援計画の作成と実践 (4) 子どもの家族への支援と対応 (5) 多様な専門職との連携 (6) 地域社会との連携 3. 保育士の多様な業務と職業倫理 4. 保育士としての自己課題の明確化

表4 保育士養成課程を構成する各教科目の目標及び教授内容について（保育実習Ⅲ）^{vi}

4. 本学保育科で考えられる保育実習Ⅰ（施設）での対応

先にも述べた通り、今回の保育所保育指針の改定は、「保育所保育」に関する専門職として保育士を位置づけたものとみることができるが、このように保育士を限定してとらえることには問題があるように思われる。

周知の通り、保育士資格を取得するためには保育実習Ⅰ（施設）が必修科目である。その実習先については、厚生労働省雇用均等・児童家庭局長による「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」（雇児発0331第29号）の別紙2の中で、乳児院、母子生活支援施設、障害児入所施設、児童発達支援センター（児童発達支援及び医療型児童発達支援を行うもの）、障害者支援施設、指定障害福祉サービス事業所（生活介護、自立訓練、就労移行支援又は就労継続支援を行うもの）、児童養護施設、情緒障害児短期治療施設、児童自立支援施設、児童相談所一時保護施設又は独立行政法人国立重度知的障害者総合施設のぞみの園とされている。

ここでは特に保育実習Ⅰ（施設）の実習先として障害者支援施設が認められていることに着目したい。障害者支援施設での実習は、イメージとして保育士の実習から離れたところにあるが、利用者とともに生活し、日々のプログラムに取り組む中で、実習生にとっては人との関り方を学んでいく貴重な機会でもある。保育士資格を取得するにあたって、障害者支援施設も含め、多様な施設が実習先として認められていることは、保育を社会福祉の領域の一つとして位置づけ、その上で保育士を養成しようとしている表れではないかと思われる。

このようなことに鑑み、本学保育科においても、保育実習Ⅰ（施設）については、施設の特質、実習時期などを踏まえ、児童養護施設、母子生活支援施設、福祉型障害児入所施設、医療型障害児入所施設、福祉型児童発達支援センター、医療型児童発達支援センターとともに障害者支援施設を実習先としている。それは、保育士が保育所のみで子どもと関わる対人援助職ではなく、乳児院、児童養護施設、母子生活支援施設、福祉型障害児入所施設、医療型障害児入所施設、福祉型児童発達支援センター、医療型児童発達支援センター、障害者支援施設などにおいても人と関わる対人援助職であるとの考えに基づくからに他ならない。

今回の保育所保育指針の改定にみられるように、保育士を保育所保育に限定する傾向が強まっている時だからこそ、保育実習Ⅰ（施設）の指導においては、保育士が単に保育所だけではなく、乳児院、児童養護施設、母子生活支援施設、障害者支援施設などにおいても人と関わる対人援助職

であることを改めて強調し、保育を社会福祉の領域の中に位置づけた実習指導内容を構築することが求められるのではないと思われる。

5. 課題

以上、論じてきたように、新保育指針にみる保育士養成は「保育所」における保育士の活動を中心としたものが想定される。それに合わせて、保育実習Ⅰ（施設）も教授内容を考えなければならないという流れは避けられないだろう。「保育所保育士」を念頭において、今まで、本学で行ってきた保育実習Ⅰ（施設）の指導内容をどのように変更するかは、今後の検討課題となる。

ただし、ここでその方向性には触れておきたい。本学において、保育実習Ⅰ（施設）の実習は、保育士養成の専門的知識や技術の教授を中心として考える以上に、対人援助職としての基礎的な実習として位置付けている vii。この指導やあり方の方向性は、保育士養成、幼稚園教諭を含めて考えれば保育者養成にとって、文字通り基礎的な実習となり、その基礎をもとに保育所、幼稚園等の実習につながるものである。したがって、基礎的な位置づけとしている本学の指導については、変更するというより、内容を強化する、言い換えれば、どこに焦点をあて指導していくかという意味においての検討の方向性となると考える。

この考えはおそらく、本稿における新保育指針にみる保育実習Ⅰ（施設）のあり方以上に、養成校が担うべき役割を再度検討する必要があるという意味で重要なものとなると考える。

脚注

- i 平成29年度全国保育士養成セミナー 行政説明資料 P18,19
- ii 「保育士等キャリアアップ研修の実施について」雇児発0401第1号 平成29年4月1日
- iii 平成29年度全国保育士養成セミナー 行政説明資料 P59
- iv 保育士養成課程を構成する各教科目の目標及び教授内容について（素案）厚生労働省 資料 P46,47 平成29年12月4日
- v 保育士養成課程を構成する各教科目の目標及び教授内容について（素案）厚生労働省 資料 P49 平成29年12月4日
- vi 保育士養成課程を構成する各教科目の目標及び教授内容について（素案）厚生労働省 資料 P50 平成29年12月4日

- vii 大野地平・寺田博行・海老江康二・宮本茂樹「 本学保育科における保育実習Ⅰ（施設）の位置づけに関する考察」 聖徳大学・聖徳大学短期大学部「実践研究」紀要 平成 29 年

参考文献

- ・大野地平・寺田博行・海老江康二・宮本茂樹「 本学保育科における保育実習Ⅰ（施設）の位置づけに関する考察」『実践研究』 聖徳大学・聖徳大学短期大学部,2017 年
- ・大野地平・寺田博行・海老江康二・宮本茂樹「保育実習指導（施設）の現状と課題～保育実習Ⅰ（施設）における実習評価を手掛かりとして～」『(FD) 紀要 聖徳の教え育む技法 第 9 号』 聖徳大学・聖徳大学短期大学部,2015 年
- ・寺田博行・大野地平・海老江康二・宮本茂樹「保育実習Ⅰ(施設)における種別間での学生意識の差異について～児童養護施設と障害者支援施設を中心として～」『(FD) 紀要 聖徳の教え育む技法 第 8 号』 聖徳大学・聖徳大学短期大学部,2014 年
- ・大野地平・寺田博行・海老江康二・宮本茂樹「保育士養成課程カリキュラム改正後の施設実習についての学生意識に関する考察～児童養護施設で実習を行った学生へのアンケートを中心に～」『(FD) 紀要 聖徳の教え育む技法 第 7 号』 聖徳大学・聖徳大学短期大学部,2013 年
- ・寺田博行・大野地平・海老江康二・宮本茂樹「施設実習における現状と課題－知的障害児施設での実習を中心として－」『(FD) 紀要 聖徳の教え育む技法 第 5 号』 聖徳大学・聖徳大学短期大学部,2011 年
- ・大野地平・寺田博行・海老江康二・宮本茂樹「施設実習における現状と課題－児童養護施設での実習を中心として－」『(FD) 紀要 聖徳の教え育む技法 第 4 号』 聖徳大学・聖徳大学短期大学部,2009 年
- ・寺田博行・大野地平・海老江康二・宮本茂樹「保育士養成における施設養護実習の現状と課題－知的障害者入所更生施設での実習から－」『(FD) 紀要 聖徳の教え育む技法 第 3 号』 聖徳大学・聖徳大学短期大学部,2008 年
- ・武田英樹「地域に求められる保育士によるソーシャルワーク」『近畿大学豊岡短期大学論集（5）』,2008 年,pp.15-25